

将来の世界をつくる仏教

講師 東方学院院長・本学顧問教授 中村 元 博士

このたび、こちらの鶴見大学におかせられましたは、仏教文化研究所を新たに創立になられました、まことにおめでとうございます。その創立に当たりましてお招きにあずかりまして、ここで皆様にお目にかかれますのは、私といたしましては非常な喜びでございます。ただいまは、高崎学長先生からご丁寧なご紹介のお言葉をいただきました、恐縮に存じております。私は、前から鶴見大学とはご縁がございまして、じつと座って思い出しますと、創立以来の学長先生やまた教授の先生方、さらに事務の方々までも、お姿が眼前に思い浮かんでくるのでございます。

最初の創立者でいらっしゃいます中根環堂先生には、いろいろなところでお目にかかりました。それから三沢智雄先生は、大学の先輩でもございましたし、非常にかわいがっていただきまして、何かの折には信州のお寺へ参上したこともございます。その後、渡辺棟雄先生には非常にお親しく願っております、ただいまご紹介のお言葉がございましたけれども、あるとき渡辺先生が私をお尋ねくださいまして、いよいよ大学を発足させるに当たって、専任の先生のほかに顧問教授というのを置くことにしたから、おまえはこれになれとおっしゃいました。大先輩のおっしゃることですから、いや応なしに受けてしまったのでございますが、大学の先輩、二十年ぐらい先輩です。先生は島根

県のご出身でございまして、私は向こうで生まれただけですけれども、同県の後輩ということになりますので、特別にお親しくしていただきました。

いろいろなことを思い出すございですが、そのところに比べまして、鶴見大学はますますご発展あられまして、殊に図書館をこのように立派につくられたということ。大体、大学などを経営している方々の立場から申しますと、図書館とか研究所というのは経済的に引き合わないんですね。ところが、それを見事に実現された。今更ながら深く感じ入りましたのでございませう。このような立派な図書館もつぐられ、研究所がやがて成立する。私の立場としても平生サボってばかりで、出欠常ならずという言葉がありますが、私はどうも至るところ、欠席常なりでございませう。本日こちらへご臨席の方々の中にも、平生ご厚誼に願っておりますが、どうも欠席常なりの方で甚だ申し訳ないんですが、高い壇上からおわび申し上げます。

失礼ばかりしているものですから、何かと思ひまして、私の気持ちだけでございませうが、普通の大学や図書館にないものを三つお届けいたします。

一つは、私の恩師の宇井伯寿先生が苦勞しておつくりになりました、日本の古典の中に出てくる仏教語を全部解釈された辞典の原稿があるんです。「おまえ、これを何とかしてくれるだろう」と。先生がほかの人に、「そのうち中村が何とかするだろう」といつてくださった。ところが、私はどうも無力でございまして、どこの出版社に行っても、いよいよという土壇場で断られてしまふんです。そのわけは、結局、経済問題です。非常に立派な原稿なんですけれども、それを現在の辞典に合わせるように整理し直してということになりますと、経済上引き合わないということなんです。日本の古典の中に出てくるあらゆる仏教語、それを解釈した辞典の原稿ですが、とりあえずの処置といたしまして、大本山総持寺様の宝物殿の中に納めて、これなら焼けることもないだろうと思ひまして、預かっていただきました。

た。ですから鶴見大学の先生は、必要な方はもうご利用になっておられるはずです。

それから、参上するんだからと思ひまして、恩師の宇井先生の原稿、『訳経史の研究』ですが、これをいただいたのが私の手元にあるんです。先生は、本が出ますと後の原稿は廃棄されました、もし書き換えられる必要があるときには、再版のときにまた手を加えたいというお立場でした。ところが、先生がお亡くなりになる間際の最後のご原稿は残っていたんですね。奥様があなたに上げますよとおっしゃってくださったものですから、お許しを得ましていただきまして、大事にしておりました。私が息をしている間は大事にとっておきますけれども、あすどうなるかわかりませんので、そのことを考えますと、やはりここでこういう立派な図書館ができて、研究所もできたというわけですから、こちらでしかるべくご利用いただく。その原稿がすぐに生きるということはないでしょうけれども、我々の大先輩、大先生がこういうぐあいに原稿をまとめられたんだということをごらんいただきますと、これからの若い方々に対する一つの鼓舞、激励になるかと思ひまして、今日もってまいりました。

三番目といたしましては、そのころは東京帝国大学とっていただけころですが、私は昭和八年に入りましたが、そのとき以来、東京帝国大学文学部の講義の要綱を記した要覧、『便覧』といいますが、約六十年間のもがあるんです。これも私がばたつといたらそれきりだと思ひまして、こちらで生かしていただければいいと。殊に、鶴見大学の学長先生は東京帝国大学のご出身の方が非常に多い。いまご挨拶くださいました高崎直道博士は、宇井先生が学者として、特にその才幹を高く評価しておられたということを私は知っています。そういうこともありますし、これはここで生かしていただきたいと思います。他方、国立大学なんかでは、そういうものを一々受けてはいただけません。ものですから、これも今日こちらへもってまいりました。だから、その『便覧』というのが六十何冊ございます。

このようなことをご披露いたしますのは、私がこの研究所の設立を非常に喜んでいてということをご了解いただけ

るかと思ひますし、どなたかがご記憶にとどめていただきますと、残されている文化財を何かの形で、何かの折に生かしていただくこともできるのではないかと思つて、私としてはきまり悪いようなことでございますけれども、あえてご披露に及んだわけでありませう。これからこの研究所がますますご発展になるであらうと、それをご期待申し上げます。

こちらへ伺いますについて、皆様にどういふことを申し上げたらいいか、学長さんにご相談してみたのですが、そうしたら、ここに出ていますような、こういうテーマで皆様に申し上げてくれといわれるんです。今は関係ありませんけれども、体が元気なころには、国立大学で試験をせねばならなくて試験なんかをした。その報いが回つてきまして、今度は、この八十幾つの老人が試験されるような目に遭つて、「因果はめぐる小車^{おぐるま}」というやつですね。けれども、皆様のご希望になるんだから、このテーマについて何とか申し上げましよう。

ごく世間一般の理解ですと、東洋文化と西洋文化とがある。そして、西洋の文化が東洋の文化に影響を及ぼしたと思われております。けれども、西洋人は、研究でも意見でも何でも自分の立場からまとめますから、自分の方から影響を及ぼしたということばかり述べ立てる。よく調べてみますと、実は西洋の文化を東洋の文化がつくつたという面もあるのです。

それを申し上げますと、東洋の思想が西洋に伝えられた一番古いものは何かということになりますが、私の知るところでは、メガステネース (Megasthenes) の『インド見聞記』 (Ta Indika) だと思ひます。アレキサンダー (Alexander) が西暦前三世紀にインドへ入つてきました。今でいえばパキスタンです。どうも部下の将兵がいうことを聞かなかつたり、インドの軍隊が象兵を擁して立ち向かうというようなことで、アレキサンダーは進めなかつたんです。それで兵を引いてバビロンへ帰ります。バビロンで彼は亡くなつたわけです。その後、アレキサンダーが

領有していた土地を部下の将兵がそれぞれ分割して所有し、統治したのです。そのときのシリアの王様、セレウコス・ニーカトル (Seleukos Nikator)。ニーカトルというのは「勝利者」という意味で、戦争をすればいつでも勝っていたというわけです。その人が、自分はアレキサンダー以上になってみせるというので、また軍隊をインドへ送ったわけです。しかし、戦争はなかなか思うようにいかなかった。そこで、セレウコス・ニーカトルと、インドの当時の新興の王様であるチャンドラグプタ (Candragupta) と二人の間で和議が講ぜられたんです。セレウコスは、アフガニスタンから東の方の地域は全部インドの王様にやっってしまう。それだけでなく、自分の娘をインドの王様のお妃として差し出した。これは何のことはない、体のいい人質です。それに対して、セレウコスは何を得たかと申しますと、象五百頭をもらったというんです。象をもらって何をしたんだと思われるかもしれませんが。動物園に入れてペット扱いにしたのか。そうではないんです。象というのは、当時の最強の武器だったんです。一つの国が武器を発明しますとすぐ他国に移ります。どこかの国が原子爆弾をつくった。そうするとほかの国がすぐまねするでしょう。それと同じことです。セレウコスは、インドの王様から五百頭の象をもらいますと、すぐにエジプト、シリアの戦線へ運んでいって戦争で使ってみたら大勝利を博した。原子爆弾を使ったら必ず勝ちますよ。

そこで和議を講じたわけですが、シリアの王様セレウコスが、インドのチャンドラグプタ王のもとへ送った大使がいる。それがメガステネースという人です。そのメガステネースの『インド見聞記』というのが残っている。この場合にも、インドの象さんたちが西洋の戦争に貢献したということですね。のみならず、メガステネースの『インド見聞記』には、インド人の世界観というものが述べられているんです。

要点を申しますと、インドのバラモンたちも哲学をもっていたというんです。それはちょうどユダヤ人が哲学をもっているのと同じだというんです。ギリシャ哲学とインド哲学とが似ている点もあるということを書き立てています。

その本はもうなくなつたんです。けれども、引用された断片がギリシャ語、またはラテン語によって後世の書物の中に伝えられている。それをドイツのシュワンベック (E・A・Schwanbeck) という学者が克明に集めて、ドイツでラテン語訳をつけて出版しております。西洋人は昔から東洋人をばかにしたわけです。けれどもこの時代には、明らかに東洋における哲学的思索というものの存在を認めていたということがいえるのです。

さらに時代は移ります。西洋の宗教というものは、東洋の宗教なしには存立し得なかつたのです。これは申し上げることは幾らでもありますが、西の方のキリスト教、ことにカトリックの儀式をごらんくださいませ。お灯明を上げるでしょう。それから、お香をたきますね。そして今の日本人、東京の人が、浅草の観音様でお香を体に浴びていますね。あれと同じことをカトリックの教会でやっているではないですか。それからお坊さんの生活だって似ていますね。大体独身の人々が中心になっている。それも男性と女性と両方ございます。そして教団の中核を形成する。これはユダヤ教のあり方とは大変違います。

それから、皆様、合掌なさいますが、西洋でも、カトリッカー、カトリック教信徒は合掌するでしょう。なぜか。これは、インドから取り入れたんです。合掌の習俗というものは、インドでは仏教以前からございました。けれども仏教の普遍主義的な動きに乗じて、西洋へ伝わったのです。だからキリスト教徒でも合掌いたしますね。ただ、合掌の仕方が後代になると少し違ってくる。カトリッカーと東方教会は大体、仏教のとおりですが、プロテスタントになると、私よく知りませんが、こんな風に両手の指を組み合わせます。ちよつと違いますね。あれは後代の変質ですね。それから、合掌ということはユダヤ教にはなかつたわけです。キリスト教というのは、広い長い世界史の立場からみるとユダヤ教の一種にほかならないんですから、ユダヤ教の礼拝の仕方というのは、仏教のようにしめやかなものではないですね。ラバイ (Rabbi ユダヤ教の聖職者・ラビ) があのような帽子をかぶるでしょう。そして、儀式で

もありませんと、陰の方から出てきまして、天を仰いで「ウオーツ」とやりますね。あれがユダヤ教ですよ。ところが、それはどうもヘレニズム時代の西洋人に合わなかった。それで東方の仏教の影響を取り入れたわけです。

それから、神聖なるものに対して敬意を表する場合に、ご承知のように、仏教では、右繞三匝うにようさんそうですね。かならず右肩を向けて、こういうぐあいには回るわけです。これは左肩を向けてはいけません。左肩はインドの習俗では不吉だと思われていますから。だから、みてごらんなさいませ。西洋の宗教でも、東方宗教ではこうです。右肩を向けて三遍回るんですよ。またおもしろいことには、ちょうど三遍、*exactly three times*、ですね。私は東方教会の習俗なんかは余りよく知りませんが、ニューヨークで東方教会の集まりの習俗をみたんです。仏教と同じです。右肩を向けて、三遍祭壇の周りを回る。そして三遍でやめる。これは皆様、仏教の法会するときもお気づきのことでしょうが、俗にも申しませう、「三遍回って煙草タバコにしよう」と。そこから来ているんですね。それはインドの習俗です。仏教を通じて来たわけです。

なお、もっとはつきりした根拠があります。高崎学長とちよつと電話で話をしました。これはご承知の方もおられると思うけれども、皆様にお話ししてくれといわれるからあえて申し上げますが、お数珠です。これを西洋ではローザリー(rosary)というでしょう。ラテン語でロザリウム(rosarium)、ドイツ語でローゼン克蘭ツ(Rosenkranz)。なぜそういうか、というのですが、これは従来わからなかった。前世紀末から今世紀にかけて東西の文化交流に関する研究が盛んになりました、それをはつきり明らかにしたのはドイツのベルリン大学のアルブレヒト・ウェーバー(Albrecht Weber)です。

彼はこういいます。インドでは、お数珠のことをジャパマラー(japamala)というのです。ジャパ(japa)というのは、念じて唱えること、つぶやくことです。それを西洋人が耳で聞いた。どういう意味かと聞いたんです。

そうすると、ジャパもジャパーも耳で聞いたってその区別はわからないでしょう。ジャパというのは念ずること、つぶやくことです。ジャパー (japa) というのはバラ (rose) のことなんです。殊にシナバラといいますが、そういうバラの種類があるんですか。辞書にはそうなっています。だから、ジャパーと聞くとシナバラ、それから輪 (mala) になっっているでしょう。だから、ローゼン克蘭ツ (Kranz は「花輪」) なんてのはちようど合うわけです。これを「念ずる輪」とは聞かないで、「シナバラの輪」と聞いたわけです。それが西洋へ伝わった。だから英語ではローザリー、ドイツ語ではローゼン克蘭ツ。アルブレヒト・ウェーバーの『インドにおけるギリシャ人』 (Die Griechen in Indien) という本がありますが、その中に書いていますから、詳しく知りたいと思う方はそれをごらんくださいませ。そうすると、信仰の一つのしるしと思われているものが、実は仏教から出発して西洋へ入っていったわけです。西洋のキリスト教の全部ではないけれども、一部を形成したということがいえるんです。

それから、お釈迦様の伝記、仏伝というのがございますね。仏陀の誕生、あるいは求道の歴史を書いた仏伝でございいますが、文化史的に特に興味が深いのは仏教の「世尊」、バガヴァン (Bhagavan) ということばです。それから「菩薩」、道を求める人、これがカトリック教に取り入れられまして、特別な聖者の名前になっているんです。このバガヴァンが変わりまして、中世の西洋ではバルラーム (Barlaam) となった。それから菩薩はボーディサットゥヴァ (Bodhisattva) ですが、それが中央アジアで音韻の変化を受けてヨアサフ (Josaph) となったんです。バルラームやヨアサフの物語というのが西洋でずっと広がりまして、その伝記をみると、お釈迦様の仏伝そっくりなんです。なぜかという、もとはインドで、それが西洋へ流れていって、宗教物語をつくっただけでしょう。それがキリシタン、バテレンとともに日本へ到来したわけです。日本では『サントスの御作業』 (アクタ・サンクトールム Acta Sanctorum) なんて名前で、キリシタン文学の中に入っている。仏伝と似てるなというところまでは日本人も気づ

いているわけです。けれども、それはもとが同じなんだから似ているのは当たり前なんです。そのことを当時の日本人も気づかなかったし、それから西洋から伝えたキリシタン、バテレンの宣教師たちも気がつかなかった。そのもとをつくったのは仏教なんですから、カトリックの聖者の理想も仏教によってつくられたということができるわけでございます。

そのほか、丁寧に洗ったらもつとあるでしょう。哲学の方だけで申しますと、初期のキリスト教の思想というのは仏教思想の影響のもとに成立したというんです。あれ、変なことをいうなあとお考えになるかもしれませんが、これは決してインチキではなくて、ドイツのエルンスト・ベンツ (Ernst Benz)、専門家の方はあるいはベンツにお会いになった方もおられると思うけれども、その人が『初期キリスト教神学に対するインドの影響』(Die Indische Einflüsse auf die frühchristliche Theologie) という本を書いているんです。インドの影響というけれども、仏教の影響が主です。これはマインツのアカデミー (学士院) の出版部から公刊されておりますが、要点はですね、仏教の影響というものはいきなりカトリックなんかには出てこないんです。「アレクサンドリアの教父」といわれるキリスト教の思想家たちがいました。あの人たちの書いたものに仏教の影響があるということを、ベンツさんはしきりに論証しているんです。殊にマニ教によく出てくる。

古代において東西にわたっていた普遍宗教は何かというと、正直に申しますと、仏教でもなければキリスト教でもないです。マニ教です。仏教は大体、東に偏っていた。キリスト教は西の方に偏っていた。どっちでも普遍性を主張したのがマニ教だと思います。マニ教に関する研究は、このごろ非常に盛んになっております。

それから、アレクサンドリアではオリゲネース (Origenes) の書いたものに影響がみられる。オリゲネースにはゼーレンヴァンドゥルング (Seelenwanderung)、「輪廻」の思想がある。また後期プラトン学派の新プラトン学派にも、その影響がみられる。それ以外に、クレメンス (Clemens) の思想を特志の研究家は調べていただきたい。ク

レメンスの著作の中には「ブッダ」という言葉が出てくるんです。ギリシャ語の本に「ブッダ」は出てこない。ただ、クレメンスの書いたものの中には、「Boutta」と書いてあります。これもブッダを移したんです。キリスト教の神父ですが、物好きでこんな名前を移したのではないんです。彼の哲学的立場に基づいているわけです。キリスト教というのは、キリストとともに始まったものではないというんです。それ以前に宇宙の真理を伝えた人々がいる。つまり、ロゴスを伝えた人々がいる。それで彼はギリシャの哲学者などをずっと挙げています。それ以外に、インドにだってブッダがいたというんです。ブッダはロゴス、宇宙の真理を伝えた人である。たまたまそのうちの一人として後で出たのがキリストだという解釈です。こういうものは後代のカトリック教会にとっては、とんでもない邪説だというんで弾圧されてしまったわけです。けれども、今ごろになってそれが問題にされているというのはおもしろいと思います。

そういう物の考え方というものは、アレクサンドリアの教父だけではないです。たしか、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)の書いた論文の中に出ていたと私は記憶していますが、今ちょっと調べてきませんでした。彼は、クリスチャン、キリスト教徒という者は、そのように真理を信じて実行していた人がジーザス・クライスト(Jesus Christ)以前にもいたというんです。ただ、恨むらくは、ジーザス・クライスト以後、クリスチャンが一人もいないことだというんです。これは当時の西洋人に対する痛烈な皮肉ではないですか。

総じて、東洋のインド哲学もそうですし、仏教哲学もそうですが、大体合理主義の立場に立っています。根本の理法があり、それにのっとる。ところが、西洋の思想、宗教はそうではない。たしかシュバイツァー(Albert Schweitzer)が「西洋の宗教はウンローギッシュ・レリギオーネン(unlogische Religionen)だ」といつています。非合理的、非論理的な宗教である。それはそうでしょう。真っ暗なところで何だかいただいて、飲んだり食べたりしなければ救われないなんていうのは非合理主義です。古い時代には、西洋で仏教的な思想を抱いていた人がいた。そ

してそれをベントツがこのように、明らかにした。論文としては薄いですが、ギリシャ語とラテン語の引用が実に豊富です。だから、ご興味のある人は当たってごらん下さい。ベントツさんは最近亡くなったようですが、ベントツの先輩になるんですか、フリードリッヒ・ハイラー (Friedrich Heiler) に会ったときに、「あなたはこの本の内容をどう思いますか」と私は聞いてみたんです。ハイラーというのはドイツの宗教学界では一番偉い人ですが、「ここに書いてあることは全部本当だ。自分は全部承認する。そのほかにまだたくさんあるよ」というんです。その主張を基礎づけるようなものです。西洋の学界はそこまでいっているというわけです。

もし熱心にこういうことを研究したいと思われる方がありましたら、リヒャルト・ガルベ (Richard Garbe) が書いた『インドとキリスト教』(Indien und das Christentum) をごらんになってください。ドイツ人が書いた本ですから、脚注がうんとあるんです。本文の何倍もある。いいか悪いかは別として、いかにもドイツ人らしい本ですが、英訳の方が手っ取り早いからお考えの方もおられるかもしれません。私もアメリカにいましたときに英訳を注文して手に入れたんですが、だめです。脚注の部分が全部とってある。訳してないんですよ。本文だけを訳してある。つまり、アメリカ流にすぐ実用に役に立たなければいかん、アメリカ的なプリンシプルがあるわけです。だから注釈なんか要らない。日本の学界みたいに、どの本の何ページの何行ということを克明に書くような学界では、やはりこつちでなければだめです。

リヒャルト・ガルベというのは、宇井伯寿先生がつかれた最初の先生です。宇井先生は外国におられても、結局師事されたのはガルベだけではないですか。高楠順次郎博士が、「おまえは歴史的に研究するからガルベのところに行け」といわれたそうです。先生がガルベのところに行かれたら歓迎してくれたそうです。英語で懇切丁寧に説明してくれた。けれども、翌日からは英語を使うことを許さなかった。これはドイツ人ですね。それから、モニエル・ウィリアムス

(Monier-Williams) の『サンスクリット大辞典』がある。それを宇井先生がみておられたら、「君は何を読んでるんだ」とガルベ教授が聞かれたというんです。「オックスフォードの大学者のモニエル・ウィリアムスがつくった大辞典です。」「ふうん、そんな本があるのかい。そんなもの、みちゃいかん。」「ベートリンク (Otto Böhtlingk) / ロート (Rudolf Roth) の、こんな厚いのが七冊あるでしょう。」「あれを引け」というんです。おもしろい、いかにもドイツ的な先生でしたね。ただ細かに知りたいと思う方のために、それを申し上げておきます。

ですから、中世にも東からの影響が何かの形で残っていたということを申し上げたい。それから中世の西洋文化にはすぐれたものがあって、日本人の心を打つものがありますが、殊に問題になると思って、ついでを利用してみてきたのは、南ドイツにアウグスブルグという町があります。あそこにフッゲライ (Fuggerei) という養老院があるんです。社会事業というものは西洋人が独占しているように日本人は思っていますが、そんなことはないんです。西洋で社会事業としての養老院が始まったのは、南ドイツのアウグスブルグにあるこのフッゲライが最初だといわれています。私が行ってみましたら、確かに個々のアパートメントの部屋はゆったりして、一緒に行った日本婦人なんかは、「あら、私ここに入ってみたいわ。私が日本で住んでいるうちより広い」なんて。確かにそうですが、しかし理想が違います。フッゲライに入るのを許されるのはカトリック信者で、フッガー (Fuggerei) 家の雇い人でなければいけない。

ところが、日本では、その時代に忍性律師が奈良の般若坂にハンセン病のための病院をつくられたでしょう。それから、鎌倉では極楽寺を中心として非常に大規模な社会事業が行われました。あれは西洋には例のないことです。日本人は西洋崇拜が強いものだから、フランチェスコ (Francesco) が小鳥に説法したなんて話を聞くと、鳥・けだものにも慈悲の精神をもっていった人みたいにあがめています。オールダス・ハクスリー (Aldous Huxley)

なんかが書いているのによりますと、フランチェスコは動物に対する慈悲心というのはもってなかった。その証拠には、彼の弟子が病人にスープを飲ませたいと思って、生きた豚の足を切ってもってきたのを非難した。非難したのは、教会に属する財産を勝手に処分したのはいかんという理由なんです。へえ、そんなことがあったのかなと思いました。私はハクスリーの『永遠の哲学』(The Perennial Philosophy)を読んでいるときに知ったんですが、西洋人にいろいろ聞いてみると、西洋ではかなり有名な話だといっています。

とにかく、ほぼ時代を同じくして、日本では慈悲の理想に基づいて人々を救うというのが現実化していた。殊に、奈良へいらした方は、古美術の好きな方はそちらをみられたらいいですけど、北の方の般若坂の忍性律師がつくられた病院をごらんになる方がいいと思います。後でつくり直したものですけれども、当時の様式のものはまだ残っています。将来、人々の間に慈悲の精神を行き渡らせるという理想を実現するためには、この忍性律師の活動なんてものは本当に頭の下がる、我々のたどるべきものだと思います。忍性律師は宗派の開祖ではないから、『日本仏教史』なんて本を皆さんがごらんになっても出ていません。総じて、権威ある書物というのはだめなんです。なぜかという、その教団でこれはいい本だよと勧められている、それでしょう。だから、今のわれわれが本当に求めているも、それに対する答えが出てこない。

皆さんにお目にかかっていると、勝手に脱線してしまって済みませんが、近世になりますと、仏教あるいはインド思想の影響を受けて、それを自分の哲学の中に生かしたというのはショーペンハウアー(Arthur Schopenhauer)だと思えますね。そして東洋思想を西洋人の間に知らせた人は、今日でもハーブファス(W・Halbfass)なんていうドイツ人でアメリカの大学で教えている学者がいますが、パウエル・ドイッセン(Paul Deussen)の書いたものが一番視野も大きいし役に立つだろうと。

日本では、マックス・ミュラー (Max Müller) がよく知られています。マックス・ミュラーというのは偉い学者です。比較言語学、比較神話学なんてものを樹立した人です。日本の偉い仏教学者はオックスフォードに行って、みんなマックス・ミュラーの指導を受けたんです。

ただ、今後の思想性ということになると、また考えなければならぬものがある。ドイッセンの書いたものは、確かに個別的な事実に関しては古いです。古いけれども、あのものの考え方というものには教えられる。今世紀の初めに、彼は『一般哲学史』(Allgemeine Geschichte der Philosophie)を書いた。その中で、もしもほかの遊星からロケット弾を発射されて、それが地球に到達したとしよう。そこに他の遊星の人間が入っていたとします。それをつかまえてみんなはどうするか。火星なんかには哲学があるかどうかなんてことを聞くだろうと、そんなことをいっています。多分に空想にはせていることもあるけれども、今の人にとっては非常に意味のある空想をはせていると思います。

ただ、その後影響のあったのはだれかということになりますが、ドイツで非常に感化を及ぼしたのは、ヘルマン・カイゼルリング (Hermann Keyserling) の『哲学者の旅日記』(Das Reisetagebuch eines Philosophen) という本です。ドイツは第一次世界大戦で負けてしまった。もうだめだとみんなが思った。そのとき、東洋へ目が向いたんです。彼は東方の国々へ旅行しまして、鎌倉で座禅をしたこともある。この本が東に対する眼を開かせたという点では大いに意味があるんですが、今日役に立つかどうかということになりますと、私としては何ともいえないけれども、この本によって眼を開かれた、開眼されたという人がいるものですから、私はあえてお伝えしようと思う。

それはインドで先駆的なある実業家です。私は会ったことがありますが、たしかタプル (Tapur) という方です。その方が言われますには、インドでこれから発展させるべき実業はソーラー・インダストリー (Solar Industry) だということです。太陽熱を生かすべきだと。インドは広い国で暑いんだから太陽熱は幾らでもあるわけでしょう。そ

れを生かすべきだといって、デリーの郊外に太陽熱の工場をつくりまして、ドイツ人の技師を雇ってやっている人がいるんです。その人は新しいインド人として教育された。だから、インドの文明なんてだめだと教えられていても興味がなかった。それで外国へ留学して、アメリカで学んだものは電気工学であった。ところが、あるときカイゼルリンクの『哲学者の旅日記』を読んで、はっと目を開かれた。それからインドの文化、祖先の文化をさかのぼって評価する気になったと申しております。この人はラーマクリシュナミッション (Ramakrishna Mission) のランガナーターナンダ (Ranganathananda) というスワミー、お坊さんですが、その人に非常に傾倒している人です。つまり、電気工学なり、ソーラー・インダストリーなり、ぎりぎりのところまでいってインド文化へ目を向けるに至ったという人ですから、ご紹介しておきます。

西洋諸国でも、仏教に心を寄せる人はどの国にもおりますが、一番はつきりした形で出ているのはベルリンだと思います。まだ東と西が対立しているところにベルリンに行きました。つかまってしまおうと大変ですから、そのころ東ベルリンに入るのはなかなか勇気がいったんです。いろいろ人から聞いて案内も受けまして、ベルリンへ入って、「ここに仏教寺院があるはずだから連れていってくれ」とタクシーのドライバーにいったんです。それで「訪問者は大勢いるか」とドイツ語で聞いてみたんです。そうしたら大勢いるというんです。行きましたら、ベルリンの外れみたいなどころに高い丘があるんです。そこにスリランカ風、セイロン風のお寺がございました。そしてアメリカ軍の将兵の家族たちがみんなお参りに来ています。そこでは仏教書なんかも売っているし、それを手にしている。アメリカ人の将兵としては予想もしなかったことでしょうけれども、ベルリンなんて変なところまで送り出されて、そこで仏教のお寺にお参りする。私にとって非常に興味がありましたのは、玄関の前に絵がかいてある。何かといいますと、鎌倉の大仏さんの油絵なんです。それも夕方の光景でした。ベルリンでみる鎌倉の大仏さんの姿というのはまた特別

な、非常に印象深いものでありました。そういうぐあいにして広がっていくんです。

アメリカは大国ですが、文化的伝統がヨーロッパに比べて何となく弱いのです。だから、逆に東洋思想を受け入れやすい。アメリカで東洋思想を受け入れて生かした思想家というと、古いけれども、やはりエマソン (Ralph W. Emerson) でしょう。今の哲学学生はエマソンなんか読まないというんですけれども、ウェーダーンタ的な思想というものをアメリカの、殊にニューイングランドの土地で生かしたということでは全く注目すべきです。それ以上インド化していたのはソロー (Henry David Thoreau) です。最近注意していますと、時々ソローに関する書物が日本でも出るようですからご注意くださいませ。まとまったものにはなっていない。けれども、個人的に影響を非常に与えています。

私が前にハーバード大学で講義をしていましたときに、一人の初老の婦人が始終隅の方に座っていました、その方は精神病 (サイコセラピー) のお医者さんなんです。その方がこういつていました。自分は仏教の本を読んでも難しいことはわからない。けれども、お仏像をみていると自分の心がやわらぐというんです。そのオフィス、診察室へ行きましたら、日本からもつていったお仏壇があるんです。その中にお仏像も置かれています。自分はよくわからないけれども、このお仏像を患者さんにみせるだけでも意味があると思うと。こういうのは新しい形の仏教ではないですか。禅の老師の方々がアメリカで道場を開かれる。それぞれコミュニティーを残しておられますが、それがどれだけ続くかわからない。白人の間に後継者がおれば、その後を継いで発展すると思うんです。

それから、マサチューセッツの海岸をドライブしてましたら、お地藏さんがあるんです。それは、やはりお地藏さんの姿がいいなあと思った人が日本で手に入れてもってきたんでしょね。

哲学者の間で仏教の影響があるかどうか。従来、英米哲学というのは大体西洋に限られていました。私が知ってい

るところでは、ウィリアム・モリス (Williams Morris) が仏教的世界観を一番生かしている人ではないかと思うんです。モリスさんはハーバード大学の教授で、それからシカゴ大学へ移り、晩年はフロリダ大学でグラジュエイト・プロフェッサーとして生活していました。グラジュエイト・プロフェッサーというのは博士論文を書く人の指導だけしていればいいというんです。それは楽な仕事だろうと人は思うけれども、本人になってみると楽ではないんだと。博士論文を書きたい人を一人一人指導しなければならぬ。そうすると、そのために自分もいっぱい本を読んで勉強しなければならぬ。だから楽ではないといっていました。モリスさんは、将来の世の中では力で世界観を強要するようなものであつてはいけません。人間がとる生き方というものはいろいろある。種々の生き方の存在意義を認めるといのが未来の生き方である。これを「マイトレーヤ (Maitreya) の道」と呼んでいます。弥勒菩薩の道ということでもあります。つまり、西洋にない新しい思想である。私はモリスさんと会っているいろいろ話をしましたが、「自分の立場というものは、簡単にいえばブッディストといえるだろう」といっていました。そうはっきり言い切った哲学者は、私の知っているところでは西洋にはいないようです。モリスさんの思想を日本で生かした人、私の知るところでは哲学の大江精三さん、それから鶴見俊輔君。思想の科学の運動というものは独自のものです、戦後の思想の流れの中から消すことのできないものだと思いますが、そのリーダーであつた鶴見俊輔君が高く評価していたということはお伝えいたしておきます。

仏教の思想が将来の世界を導くものであるということを考えているこういう人々が、ごくわずかですがおります。最近、二週間ぐらい前までは、ホノルルのハワイ大学におりました。その哲学科の主任教授はカルパハーナ (David Kalupahana) というセイロン人です。諸国の関心のある学者を招待しまして国際会議を開いた。そのテーマは何かといいますと、「仏教の指導性と平和」 (Buddhist Leadership and Peace) 、「つまり、将来の文明に仏教が

指導性を発揮するのは平和の問題だと考えているんです。非常におもしろいと思いましたのは、この問題を学者が熱心に論じていること。それから、そのスポンサーだったのが韓国の財団だということ。今までアメリカやヨーロッパで国際会議というと、アメリカの財団がバック・アップしている場合が多かった。今のアメリカの財団には期待できないが、韓国人の団結は強いし、有意義なことだと思ってお寺へ幾らでも差し上げる。そしてホノルルの山奥な一になつてやるんです。最近稲田教授に会いまして、驚いたよといいましたら、ロングアイランドでも韓国人が大きなお寺を建てていると。ロングアイランドというのはアメリカのお金持ちの別荘地です。どんどん変わっていくなと思いました。そして、ブディスト・リーダーシップということ、これを日本の仏教家が果たしてテーマとして取り上げるかどうか。それを少なくともハワイなり韓国の仏教の指導者はあえて取り上げているということ。ここに彼らの自信のほどがみられる。今の国連だとか、あんなものの中からは本当の平和は出てきませんよ。国連なんてもをつくってみただけ、あれはみせかけだけで、原子爆弾をもっている国だけが理事になって、それでおまえたちゃつてこい、おれのいうこと聞かなければひどい目に遭うぞと、おどしているわけでしょう。そういう点は日本の仏教家にもっと突いていただきたいと思います。

こうなるとイデオロギーの対立というものも超えなければいけない。イデオロギーの対立を超えるところでは、日本はある程度成果がみられると思う。ヴィヴェーカーナンダ (Vivekananda) の百年祭が去年ありました。つまり、諸宗教が協力すべきであるということ、それをシカゴの万博で説いたのがインドのヴィヴェーカーナンダです。ヴィヴェーカーナンダの思想というものはアジア諸国では広がっており、欧米でも識者の間では広がっている。日本でも意外な形で実現されつつある。

これはいつていいかどうかわかりませんが、ヴィヴェーカーナンダがシカゴの万国宗教大会で演説をやったというのは、確かに人類の思想史の中では一つの注目すべきことだと思いますが、その百年祭の前に、やはり同じ趣旨を説いている方々が日本にもいらした。その一つは、世界連邦の運動です。日本ではどれだけ力があるか知りませんが、唱える方がかなり多い。世界連邦の運動の指導者だった方は朝比奈宗源老師です。その代理として禅宗の井上禅定老師がお伊勢さんへ行つて、世界連邦の連中がやってくる、みんなお伊勢さんへお参りさせたいといわれたんです。そうすると、お伊勢さんの大宮司様は、「うん、そりゃいいが、ただクリスチャンは困るな」と小声でいわれたんだそうです。それ以外のことは協力してやるといわれた。鎌倉へ帰って井上老師が朝比奈禅師に会つて、「結果はどうだった」と聞かれた。まず第一に、「それは快く協力を申し出られました」と。朝比奈禅師は耳が悪いんです。「ああそうか、それは結構だ」と、後はもう聞かないというんです。そして、勝手なことばかりいわれて困ってしまったわけだけれども、そういう形で進んだものだから、世界連邦の運動の連中をみんな連れていって、お伊勢さんへお参りさせてしまったというんです。後でお伊勢さんの大宮司様が井上老師に「なーんだ、おれは君にしてやられたよ」といわれたそうです。つまり、会長の禅師さんは耳が聞こえないものだから、後は聞いてくれなかった。それで通るわけでしょう。しかし私が考えてみますと、してやったのはその禅宗の代理のお坊さんではなくて、実はお伊勢さんの大宮司様ではないか。クリスチャンがお参りに来る、ユダヤ教徒も来る、イスラームも来るなんて、もしもそれをお伊勢さんの会議へ出してごらん下さい。喧々ごうごうでまともまりはしません。ところが、禅宗の坊さんが耳が悪くて、オーケーといつてすつと通してしまつたといえれば済んでしまうでしょう。それで既成事実をつくられてしまった。ヴィヴェーカーナンダの思想を解説してくれといわれまして、私は伊勢の神宮会館までいって講演をしました。この講演は印刷にもなっていますが、そのときには、ユダヤ教徒であろうと、イスラームであろうと、クリ

スチャンであろうと、全部お伊勢様へお参りすることオーケーということで、既成事実だからそれで通ってしまった。こういう既成事実が通るといふことは世界がその方へ向かっていると思うのです。つまり、教義の末端なんかでけんかする時世ではないということです。

それと似たことが鎌倉の鶴岡八幡宮でも行われています。私は委嘱を受けて、むしろ意識的に進めているんですが、あの宮司さんは神社本庁の総長、つまり代表者なんです。その方から話がありました。私がやっています東方学院の講義を自分のお宮さんでやってくれといわれるのです。面倒だとは思いましたが、私はあえて引き受けたんです。そうしたら、そちらの方の大新聞の神奈川版に出まして、お宮さんで仏教の講義をするということは百何十年ぶりになされることで、その間なかったことだというんです。それ以前は排仏毀釈ですから、仏教の汚れた教えはお宮の中で説いてはいかんと、それで通っていたわけです。それがすっかりひっくり返ったわけです。北の方に足利学校というのがありますが、私あれも縁がありまして、ここに矢島さんがおられると思うが、あそこも明治維新ころには、仏教なんて墨染めの汚れた教えなんか入れてはいかんとやっていたわけです。けれども頼んできましたから、よしとというんで、来年は多分京都の禅宗のお坊さんで、足利学校と同じようなことを京都でやっておられる方に講演願うことになると思います。こうなると宗派の末端でござたということは起こらないで済む。神社本庁の総長さん、統理といいましたか、一番偉い方がいわれるのはこうなんです。戦後、神道というものは悪いものだと教えられていた。だから、自分は肩身の狭い思いをしていた。ところが、中村の理論を聞いて救われた思いがする、と。私は何も進駐軍だの何だの気兼ねする必要はありませんから、どんどんやるということを進めているのです。

こういう余分なことを申し上げましたのも、この鶴見大学で若い方が熱意をもってどんどん進めていただければ、いつか何か新しいものが出てきて日本の行方を照らしていただけるだろうと思って、ご清聴を煩わしたわけでございます。どうも長いことご清聴いただきまして、ありがとうございます。(拍手)